

多剤耐性結核患者と診断された外国人 技能実習生への有効なサポートについて “受け入れ企業の理解とピアサポーター”

千葉県野田保健所 健康生活支援課
結核担当 野村 泰孝

I はじめに

野田保健所管内の結核罹患率の年次推移は、全国、千葉県（千葉市除く）より低い値で推移している（表）。

表 結核罹患率の推移（罹患率 10万対）

	平成27年	平成28年	平成29年
全国	14.4	13.9	13.3
千葉県（千葉市除く）	13.7	14.2	11.9
野田保健所管内	14.3	10.4	8.5

今回、野田市内で実習する技能実習生が多剤耐性結核と診断された。本事例を振り返りながら、技能実習生への有効なサポートについて報告する。

II 患者概要

A氏（20歳代、男性、20歳代前半に母国で結核治療歴あり）は、来日直後の健康診断の精密検査（B病院）で肺結核の再発と診断された。診断時の喀痰検査で塗抹陰性であったが、2か月後に培養陽性と判明し、薬剤感受性試験にて多剤耐性結核と診断されC病院に入院加療となった。入院後、副作用により治療中断することもあった。また、右肺下葉に空洞残存していたため、外科的治療が行われた。

III 不安に対するサポート

A氏は多剤耐性結核患者であり、技能実習生という立場であったことから、次の4つの不安があった。

(1) 治療に対する不安

入院はしたものの、急に入院が決まったため、母国の家族との連絡手段もなく、言葉が通じる人もいなく、本人の不安な気持ちは日増しに強くなっていった。

これに対して、技能実習生と実習実施機関の間に立ち調整役をしていた監理団体の通訳者（患者と母国が同じ）が、患者の家族と連絡がとれるよう配慮してくれた。また、月に1回保健所保健師（以下「保健師」という。）の訪問に同行して、医師や保健師等の説明を通訳することや、自身の体験（技能実習生として来日し、多剤耐性結核治療を行った。）を踏まえた励ま

しを行ってくれた。

医師や保健師等からも必ず治癒すると励ましを行い、不安をとり除くように心がけた。

(2) 実習を継続できるか

当初、入院直後に解雇の可能性もあったが、実習実施機関社長が「自分が母国で面接をし、見込んで来日させた実習生なので解雇しない。」と方針を打ち出し、退院後も技能実習生として実習を継続することになったため、滞在ビザの問題、退院後の住まいの心配がなくなった。

保健師からは、会社の従業員や同居していた技能実習生に対して、通訳者を交え結核の正しい知識等の説明を行い、退院後の生活に支障をきたさないよう配慮した。

(3) 治療費用はどうなるか

入院の医療費については、医療費公費負担制度等により問題は生じなかった。退院後の医療費については、保健師が退院前カンファレンスで病院から概算を提示してもらい、A氏が使える高額療養費制度等の社会資源の確認をしたうえで、実習実施機関社長に医療費、食費、生活費、母国への仕送り等の概算から必要な勤務時間を算定してもらい、体に無理のない勤務体制を組んでもらうように依頼した。

(4) 退院後の通院治療ができるか

入院から約5か月が経過し、喀痰培養が3回陰性になったため、退院して通院治療を行うこととなった。C病院へは月に1回通院治療し、B病院へはカナマイシン注射（週3回）をするために通院することとなった。

退院後の通院治療時、保健師は、B病院とC病院の連携と受診がスムーズにできるように調整を行い、それぞれの受診に同行し受診状況の情報提供をした。

以上4つのサポートにより不安は軽減し、前向きに治療に専念でき、順調な経過をたどることができている（現在も治療継続中）。

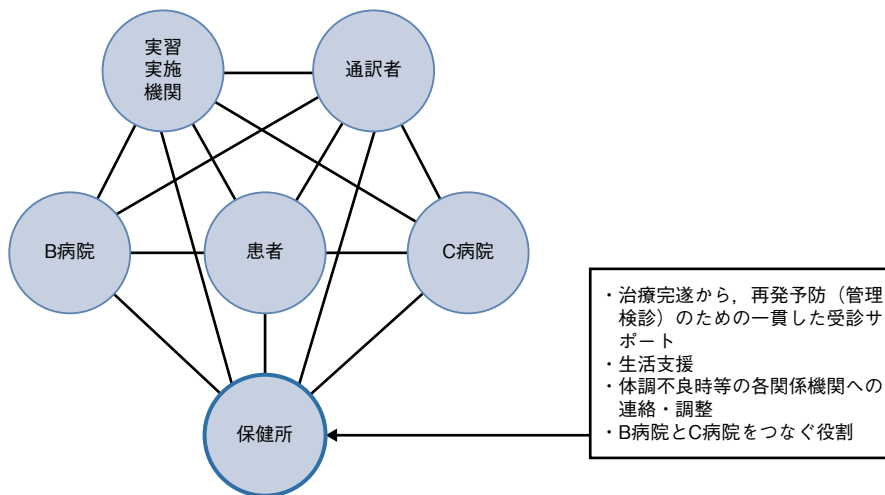


図 保健所での支援・連携

IV 治療継続ができていない要因について

(1) 実習実施機関での技能実習継続

技能実習生で長期入院が必要な場合、解雇されるケースもあるが、今回は社長自身の考えで技能実習が継続となった。これにより、医療費及び生活拠点の心配がなくなった。また、退院後は医療費が賄えるように勤務時間を調整し、体調を整えながら勤務することができた。

また、実習実施機関の同僚及び監理団体が、結核の正しい知識やA氏の現状について理解してくれたことが、退院後のスムーズな受け入れにつながった。

(2) 通訳者の存在

日本語が十分に理解できないA氏に対し、保健師の定期的訪問に同行して通訳をしてくれたことや、自身の経験を踏まえた助言を行ったことにより、A氏は今後の治療や生活に対する不安を軽減することができた。

(3) 保健師の役割

ア A氏の治療意欲の継続性

保健師がC病院への同行受診時や、B病院での直視監視下短期化学療法（DOTS）実施時に繰り返し治療継続の必要性和確実に病状が軽快していることを説明し、治療のモチベーションを維持できるように配慮した。

イ B病院とC病院をつなぐ役割

保健師がB病院とC病院の受診状況を双方の医師に情報提供することで、共通認識を図った。

ウ B病院スタッフとの連携

保健師がB病院へのスムーズな外来受診ができるように調整し、スタッフと連携をとり、治療中断しないよう外来受診状況の報告や連絡体制を整えた。

V 考察

結核と診断されたら直ちに実習実施機関先の責任者を巻き込んだ患者の支援計画を立てることが必要である。また、技能実習生は日本語での会話が難しいため、病状や治療内容について正確な情報を把握することが難しく、不安が強くなることから、母国語を話すことができ、結核の知識に長けた通訳者を探すことが特に重要であった。今回、通訳者が過去の経験からピア（同じ立場の体験者）として、関わられたこともA氏が治療に前向きになれた要因の1つだと考えられる。

今回の事例のような技能実習生の場合は、患者だけでなく、患者を取り巻く人や関係機関からも十分な情報を得てアセスメントをすることが重要である。

保健師の役割として患者と関係機関を結ぶ橋渡しをすることで、地域のネットワークづくりの構築をし（図）、患者の治療が円滑に実施できる生活環境等を整えるよう主導していく必要性について再認識することができた事例であった。

～参考～

- 1) 保健行政窓口のための外国人対応の手引き 第1版 2019年3月策定
- 2) 公衆衛生情報2019.7 外国人と結核 山口梓 結核予防会・外国人結核相談室